

児童養護施設等における児童間性暴力
の実態と予防・早期発見・対応に関する
取り組みと課題に関する研究

神戸市こども家庭センター

永井 友基

関西学院大学

原 弘輝

関西福祉科学大学

遠藤 洋二（企画者）

神戸市こども家庭センター

篠原 拓弥

日本子ども虐待防止学会 第25回学術集会ひょうご大会 COI開示

発表者：遠藤 洋二・原 弘輝・永井 友基・篠原 拓弥

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業などはありません。



神戸性暴力研究会の取り組み

神戸市こども家庭センター 永井 友基

過去から続いていた問題である

横川和夫(1985)「荒廃のカルテ」、共同通信社

「暴力が日常化した状況下で、上級生は下級生を、強い者は弱い者を暴力的に威圧するのは当然という風潮がまんえんしていた」、p88

「真夜中に起こされて布団のなかとか押し入れのなかで“なめろ”って言うんです」、p135

女子大生の強姦殺人(1983年:当時18歳)で無期懲役となった少年のルポタージュ。少年は乳児院から施設で育ち、養護施設に入所中に職員からの体罰、年長児からの壮絶な身体的、性的暴力が加えられていたことが公判の中で明らかになった。



少年の事件と施設内の経験の因果関係は明らかではないが、当該施設の養育環境が劣悪であったことは指摘されている。

児童間性暴力に関する今日の動向

施設に預けた長女(当時7)が2011年～2012年、同じ施設の少年(当時13)から下着を下ろされて下半身を押つけられるなど、わいせつ行為を繰り返し受けたとして、13年に県と施設、少年に損害賠償を求めて提訴。2017年4月、津地裁が性被害を認め、少年の母親に180万円の支払いを命じた。春日さんは県や施設の責任を認めなかったことを不服として控訴。名古屋高裁が今年2月に棄却したため、最高裁に上告している。(朝日新聞デジタル)

児童養護施設などで子供同士の間で起きた性的トラブルが、2017年度に計732件把握されていたことが26日、厚生労働省の初の実態調査で分かった。同省は同日、トラブルの未然防止や早期把握の徹底を求める通知を都道府県などに出した。施設内で起きた子供間のトラブルは自治体が国に報告したり、公表したりする法律上の規定はなく、実態を把握しにくい問題となっている。調査は委託先の民間シンクタンクが19年1～2月、全国の児童養護施設や児童相談所の一時保護所など約1400施設を対象に実施し、約1000施設が回答した。裸を撮影したり、体を触ったりするなどの「性的な問題」の件数や関わった人数についてアンケート形式で集計した。

性的な問題は732件確認され、加害者、被害者を含め計1371人の子供が関わっていた。このうち児童養護施設など社会的養護関係施設が687件、1280人を占めた。(日本経済新聞デジタル)

これまで適切な対応がなされていなかった？

児童同士の性暴力事案が発生した際、加害児童の特性(個人病理)の問題として片付けられ、加害児童を別の施設に移す(措置変更)といった表面的解決にとどまっていた。

参考:遠藤洋二(2015)「児童養護施設から児童自立支援施設へ措置変更となった児童に関する実態調査」、非行問題第221号P.P.117-133

:遠藤洋二(2016)「児童養護施設から児童自立支援施設へ措置変更された児童の背景にあるもの」児童養護実践研究第5号 P.P.12-26

その結果、

- ・措置変更された児童が、措置変更先で同様の問題を起こす
- ・被害児童が成長するなかで加害行為をに及ぶことも稀ではない
(性暴力の連鎖)
- ・加害-被害の広がり(入所児童の大半が性暴力に関わっていた例も)
- ・施設の「文化」として根付く(何十年も続く隠された慣習: Hidden Ajenda)

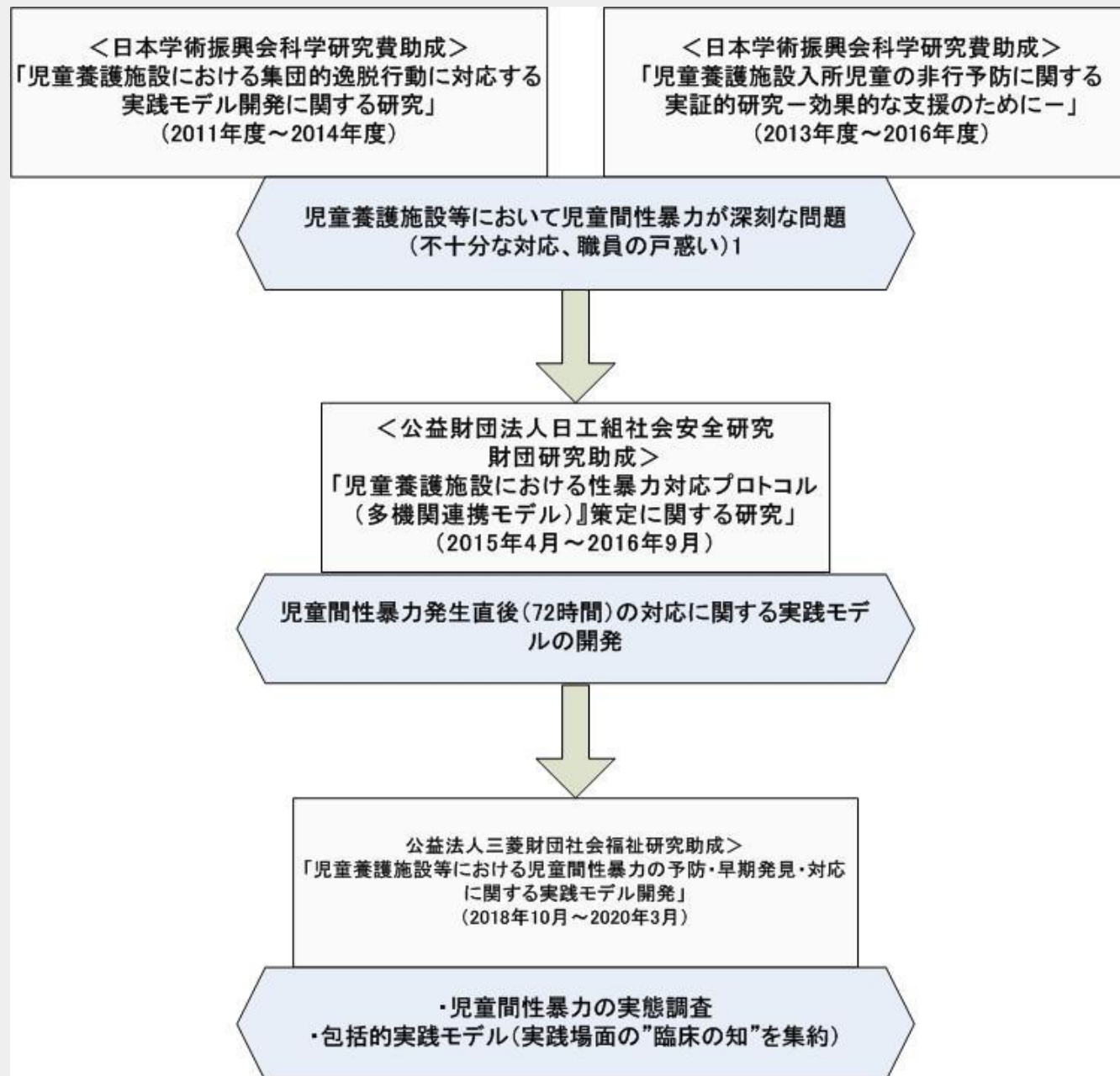
児童養護施設特有の問題ではない

- ◆子どもの集団ではしばしば起こる(学校:特にクラブ活動・寮・青少年団体etc.)
- ◆非行集団の中では、しばしばリンチの手段として性的類似行為が使われる
- ◆しかしながら、複数の児童が生活を共にし、性加害、被害のハイリスク児童が数多く入所している児童養護施設ではより踏み込んだ対応が望まれる



- ・このような問題がセンセーショナルに取り上げられ、施設の児童が偏見にさらされたり、施設否定論に結び付くことを危惧している。
- ・エビデンスに基づいた冷静な議論を重ね、暴力(性暴力を含めた)のない施設を目指し、施設をあげた戦略的アプローチが必要である。

これまでの研究活動



企画者等の研究 I

このような現状を踏まえ、企画者等は以下の研究活動に取り組んできた。

「児童養護施設の子どもの非行理解とその予防に関する研究」

・児童養護施設の子どもの非行を理解し、それを予防するため効果があると考えられる支援について、8施設11名の職員にインタビュー調査を実施

⇒児童の非行の行き着く先に性暴力があり、児童間の性暴力は、児童と児童、児童と職員の関係性や施設組織そのものを崩壊させる危機であること、施設職員にとって乗り越えにくいものであることを示唆

企画者等の研究Ⅱ

「児童養護施設から児童自立支援施設へ措置変更された児童に関する研究」

・児童養護施設から児童自立支援施設に措置変更された児童の動向、実態を明らかにすることを目的として、児童自立支援施設55か所において、2009年から2011年までの3年間に措置変更された全児童を対象に調査を実施。

⇒入所理由が、‘生活環境における不適応’の児童が、家庭等から入所した児童(措置変更外児童)が11.2%に対して、措置変更児童が63.2%、‘暴力・窃盗などの犯罪(触法)行為’の児童が、措置変更外児童43.8%に対して、措置変更児童が15.7%となっている。

このことから、措置変更児童は、措置変更外児童に比べて非行性が低く、児童養護施設の生活状況が措置変更の大きな理由になっていることがわかった。

⇒さらに、措置変更児童のうち、措置変更理由が、‘施設内不適応(性的暴力)’の児童が12.5%、‘性非行’が7.7%となっている。

このことから、児童養護施設における性問題が措置変更に一定の影響を与えていることがわかった。

実務者と研究者が協働した実践研究

「児童養護施設における“児童間性暴力対応プロトコル(多機関連携モデル)策定に関する研究」2015年

(公益財団法人日工組社会安全研究財団の助成)

・児童間性暴力に焦点をあて、それに対応する基本的な考え方、必要な取り組みを示したうえで児童養護施設でワークショップを実施、職員自身が施設の危機対応システムを見直し、児童間性暴力に対応する手順を示した、各施設でカスタマイズされた「児童間性暴力対応プロトコル」を策定するための、具体的、実践的方法論に関するプログラム開発を行った。

⇒策定されたプロトコルの重要性もさることながら、プロトコル策定のプロセスにおいて、施設が持つ「強み」や「弱点」に気づき、施設システムの変容につながる。また、性暴力をテーマに職員全体で議論することで、職員同士の相互理解が深まる。

神戸児童間性暴力研究会（性暴研）について

・2017年2月発足

・児童養護施設等、入所型児童福祉施設で起こっている「児童間性暴力」について、現状と課題を明らかにし、効果的な対応を見つけ出し、実践現場へとフィードバックしていくことを目的とした調査研究団体

・児童福祉施設（児童養護施設、児童自立支援施設、自立援助ホーム等）の職員、児童相談所の職員など児童福祉現場の実践者と、研究者、学生などで構成

・月1回の全体研究会とサブグループによるワーキングを継続的に実施

- ①入所型児童福祉施設への調査研究活動
- ②研究発表およびセミナー実施による啓発活動
- ③児童間性暴力対応ハンドブックの作成

性暴研の活動について

「児童養護施設等における児童間性暴力に関するセミナー」を開催

2018年1月

・入所型児童福祉施設内における児童間性暴力のとらえ方について論じたうえで、対応の実践例(児童間性暴力対応プロトコル)を紹介

・「より良い支援と連携のために」をテーマに、性暴研メンバー(児童福祉施設職員、児童相談所職員)でパネルディスカッションを行った

関連領域学会での発表

・児童養護実践学会、司法福祉学会、社会福祉学会、子ども家庭福祉学会等で研究発表

性暴研)による調査研究

「児童福祉施設における‘性問題’への意識調査

(植山つる児童福祉研究奨励基金) 2018年5月～

- ・施設職員が性問題に適切に対応するためには、まず職員間で性問題への意識を共有する機会が必要ではないかと考えた。
 - ・児童福祉施設職員を対象に、‘性問題’への意識についてアンケート調査を実施。施設の性問題への取り組み状況、施設職員の性に対する価値観や意識の違い等について調査をした。
 - ・性問題についての意識の差は、性別よりも経験年数に起因していること、職員同士が共有することの難しさが明らかになった。
- ⇒性問題への意識の違いを共有するための‘性意識についてのワークショップ’を策定し、実際に性暴研メンバーで実施した。

2018年10月～ 公益財団法人三菱財団 社会福祉研究助成 「児童養護施設等における児童間性暴力の予防・発見・対応に関する実践モデル開発に関する研究」

◆研究の視点

- ①特定の職員のみで対応するのではなく、職員全体の戦略的アプローチを確立すること
- ②施設のみならず児童相談所などの関係機関が連携協働して取り組むこと
- ③「予防」・「早期発見」・「対応」の視点から包括的対応を行うこと

◆目的

入所型児童福祉施設における児童間性暴力事案の具体的な内容、対応の現状や課題を明らかにしたうえで、現場の実践知・臨床知を集約し、包括的な実践モデルを提示、さらには、実践現場に還元していく。一方的なマニュアルを提示するという形ではなく、施設の特徴や地域性、他機関との関係性なども踏まえた実践モデルを、現場職員とともに作りあげていくことが最終目標である。

◆方法

M-D & D (Modified Design & Development) の手続きにのっとり実施。

フェーズ1 入所型児童福祉施設への質的調査、量的調査により、性暴力事案の内容、対応状況を把握

フェーズ2 フェーズ1によって得られた客観的データを性暴研のワーキングにより分析。予防・早期発見・対応の構造ごとに整理し、それぞれの課題に適切に対処するための方法論を体系化した実践モデルのたたき台を策定。

フェーズ3 実践モデルを各施設に配備し、具体的な取り組みを実施、その効果を検証する。

※本研究では、フェーズ3の初期段階までとする

実践現場の職員が、児童間性暴力の要因を個人病理としてとらえるのではなく、構造的に理解し、システムへの介入・変容を目指す。

現場の特長・強み・実践の積み上げ＜臨床の知＞を活かした多機関連携型実践モデルの開発

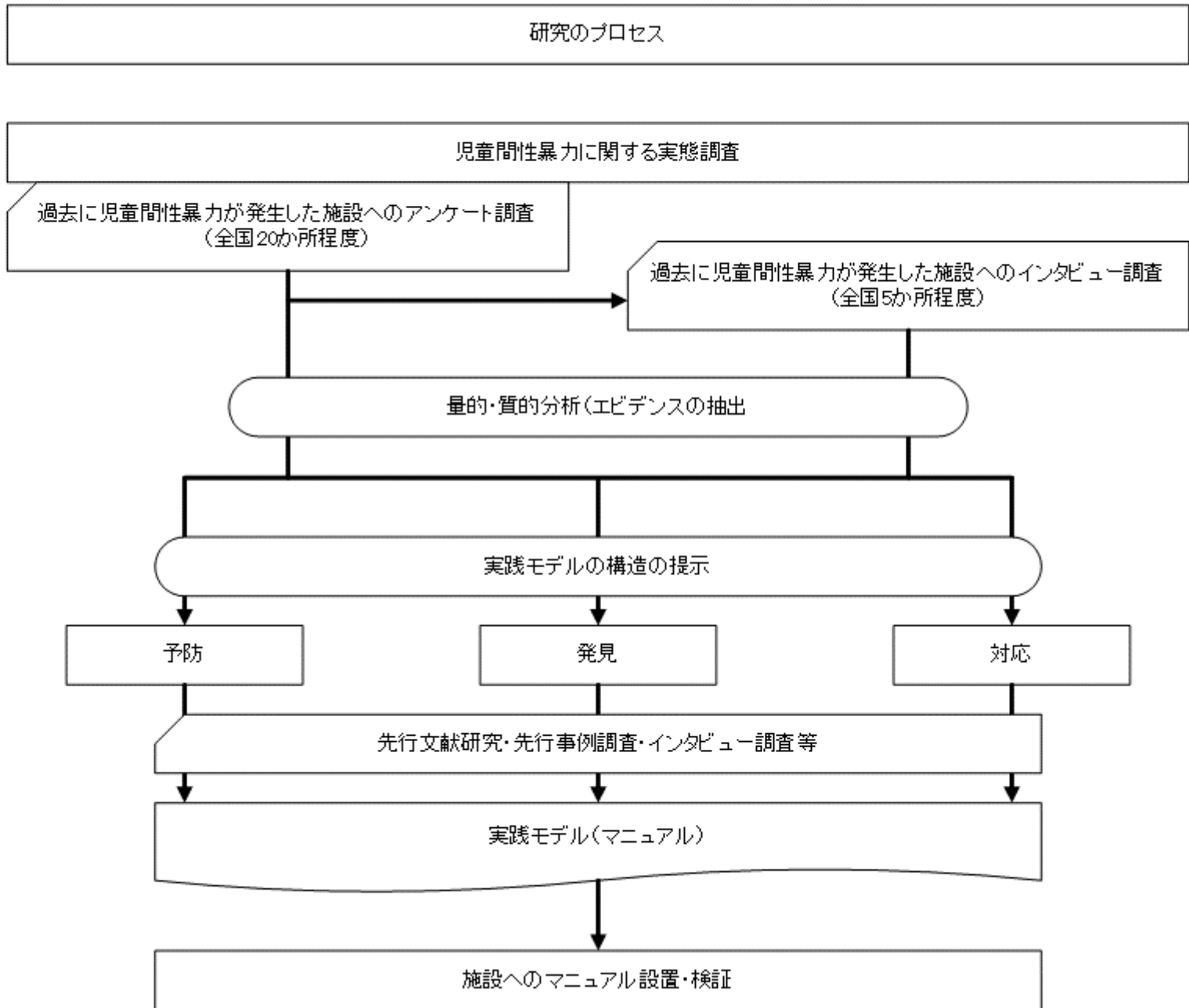
研究の概要

M-D&D
のプロセス

<フェーズ1>
問題の把握と分析

<フェーズ2>
たたき台の策定

<フェーズ3>
試行と改良





児童間性暴力の実態調査から見えるもの (中間報告)

関西学院大学

原 弘輝

調査方法と倫理的配慮

➤ 調査方法

研究の性質上、調査協力を依頼する施設に対し、事前に趣旨・倫理的配慮・方法等を説明し了承を得たうえで調査を進めていった。調査協力が得られた施設での調査後、当該施設と協力関係にある施設に広げていく「スノーボール方式」を採用した。

実態調査については、アンケート調査の形式で実施したが、取り扱う課題がデリケートなものであることを考え、調査票を送付するのではなく、調査員が調査対象施設を訪問し、説明を加えながら質問項目を聞き取り、その場で直接入力する形で実施した。

➤ 倫理的配慮

本研究は「日本子ども虐待防止学会研究倫理規定」に則ると同時に、企画者が所属する関西福祉科学大学研究倫理審査会の承認を得たうえで実施した。調査対象施設についても、訪問し調査の趣旨、個人情報等に関する事項等を説明し、同意書に署名をいただいたうえで実施している。

調査項目

➤ 調査項目

＜加害児に関する項目＞

生年月日・入所年月日・退所年月日・性別・年齢(当時)・学年・知的能力・障害の有無・発覚後の措置・一時保護の有無・一時保護後の措置・被害体験の有無とその内容・被虐待経験有無とその内容

＜被害児に関する項目＞

生年月日・入所年月日・退所年月日・性別・年齢(当時)・学年・知的能力・障害の有無・一時保護の有無・一時保護後の措置

＜事案内容に関する項目＞

事案発生日・発生回数・発覚日・発生場所・発生時間・行為の内容 その他の暴力の有無と内容・発覚の端緒・発見した職員の実験年数

＜当時の生活環境に関する項目＞

居室の形態・部屋の人数・寝具・生活集団の児童数

性暴力の定義

本研究における児童間性暴力とは、性交、肛門性交、口腔性交、性器を含む身体の愛撫、性器を舐める、キスの強要等の直接的な行為や自慰行為の強要、裸になることの強要、ポルノ雑誌や自らの行為を見せる、不快な思いをさせる性的な発言、ベッドに侵入し一緒に寝ること等の間接的な行為も含め、性的行為が力の強い者から弱い者への望まない形で行われるものを性暴力として捉える。望まない形とは、完全な同意がある行為以外であり、直接的な暴力や脅迫を用いないが、何らかの圧力によって同意をした場合は望まない形での性的な行為と考える。

また、同等な力関係に基づく合意以外の場合や一方に十分な判断能力が備わっていない場合などは、仮に合意があったとしても性暴力とする。

直接的行為	性交、肛門性交、口腔性交、性器を含む身体の愛撫、性器を舐める、キス
間接的行為	自慰行為の強要、裸になることの強要、ポルノ雑誌や自らの行為を見せる、不快な思いをさせる性的な発言、ベッドに侵入し一緒に寝ること、下着を盗む等

性暴力と暴力を伴わない性的行為との線引きは難しく、研究会においても明確な定義が提示できない状況であり、調査対象施設においては、調査対象の範囲を「性的逸脱行動」と幅広くとらえ、最終的にデータを分析する際に研究会において性暴力の範囲を検討した。なお、訪問調査では、施設から報告のあった事案において、明らかに本調査の対象ではないと思われるものについては、調査員の判断で調査対象から除外した。

調査協力施設ごとの調査概要

施設ID	調査実施年月日	事案数	ケース数	加害児	被害児
1	2018/10/13	17	20	14	15
2	2018/12/27	4	6	3	5
3	2019/1/23	15	29	13	17
4	2019/1/23	1	4	4	1
5	2019/1/26	8	15	8	10
6	2019/1/27	6	6	6	3
7	2019/1/27	13	13	7	11
8	2019/2/8	9	12	8	7
9	2019/2/10	1	3	1	3
10	2019/2/18	49	77	22	30
11	2019/2/18	15	16	11	8
12	2019/2/23	1	1	1	1
13	2019/2/25	9	18	7	14
14	2019/3/11	3	15	8	8
15	2019/4/13	14	22	11	18
16	2019/3/11	10	13	10	10
17	2019/3/10	3	5	3	5
18	2019/4/27	7	12	7	9
19	2019/4/28	4	8	5	4
20	2019/4/20	6	11	5	11
21	2019/5/19	2	2	2	2
合計		197	308	156	192

※なお、21施設の施設種別の内訳は、

児童養護施設:16施設

児童自立支援施設:3施設

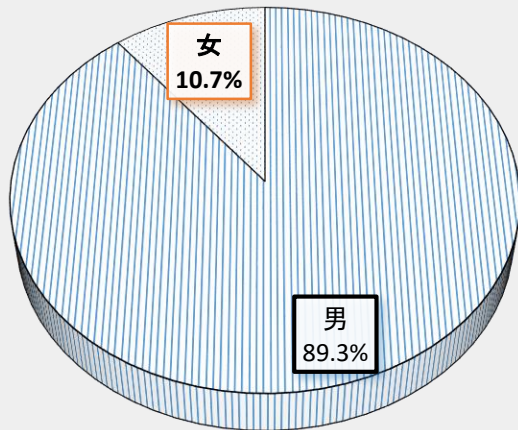
障害児支援施設:2施設

となっている。

※ケース数が多く、調査実施日が複数日程にわたった際は1回目の日程を記載している

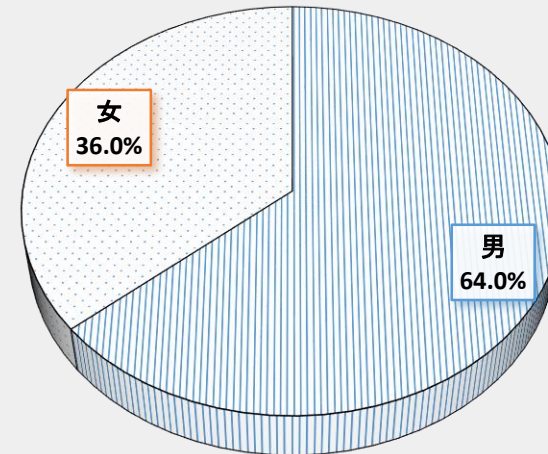
加害児・被害児の性別

加害児 性別



	度数	%
男	275	89.3
女	33	10.7
合計	308	100

被害児 性別



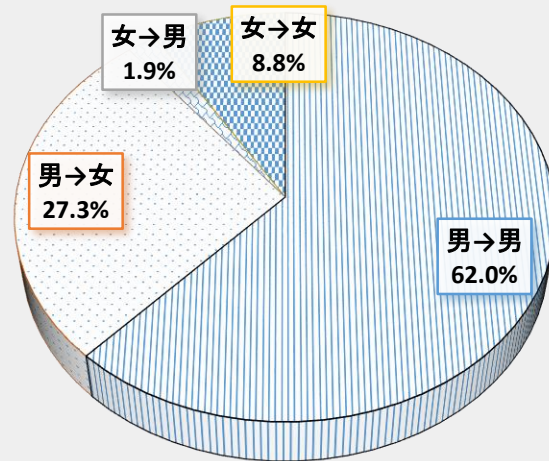
	度数	%
男	197	64.0
女	111	36.0
合計	308	100

今回の調査で挙げたケースのうち、89.3%の加害児が男児という結果となった。また、被害児についても64.0%が男児となっており、児童養護施設等の入所児童同士で行われる性暴力については、男児が加害児にも被害児にもなりうる可能性が高いことを示している。

一方で女児はこのようなケースに対し、性被害、という形で関与する可能性が高いといえる。

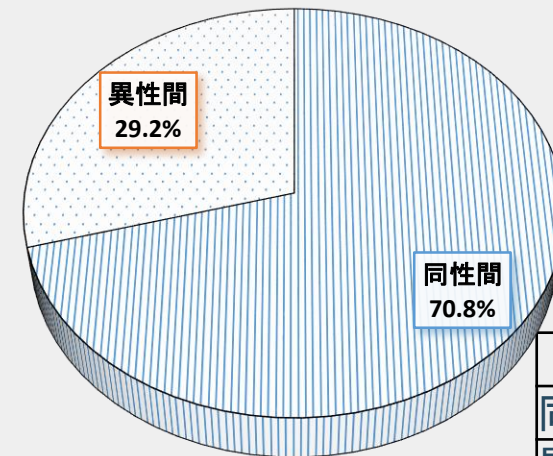
加害被害関係

加害被害関係



	度数	%
男→男	191	62.0
男→女	84	27.3
女→男	6	1.9
女→女	27	8.8
合計	308	100

加害被害関係(同性間・異性間)

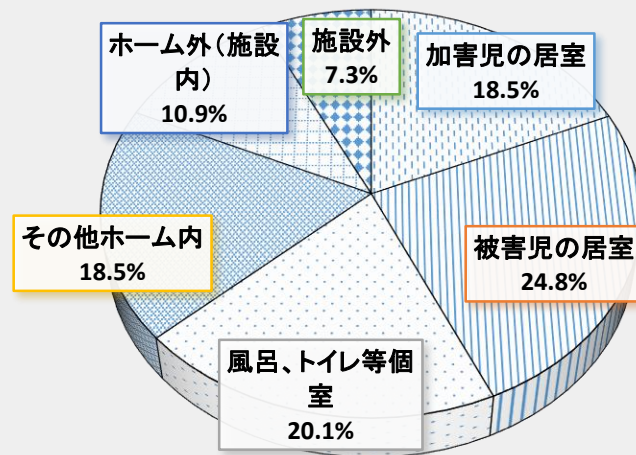


	度数	%
同性間	218	70.8
異性間	90	29.2
合計	308	100

男児から男児によるケースが191件となっており、全体の62.0%を占めている。次いで、男児から女児、女児から女児、女児から男児という割合で推移している。また、男児から男児、女児から女児を同性間事案、男児から女児、女児から男児を異性間事案と整理したところ、全体の7割が同性間ケース、3割が異性間ケースとなっている。同性間ケースの当該加害児童の性的指向がすべて同性とはおよそ考えられない。ここから、児童間性暴力において、その行為が純粋な性的衝動のみによるものではなく、他の力動が関係している可能性を示唆できる。

ケースの特徴 (ケース発生場所)

ケース発生場所

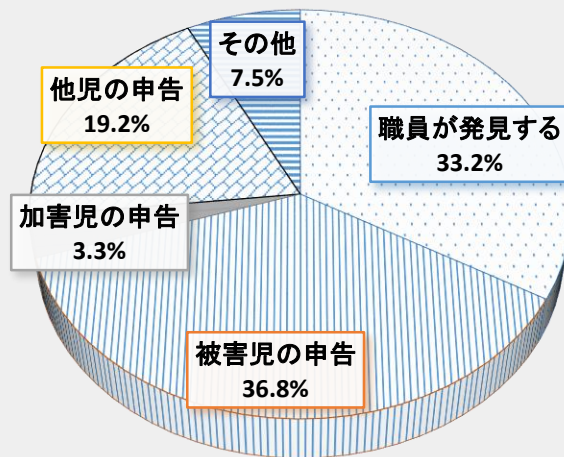


	度数	有効%
加害児の居室	56	18.5
被害児の居室	75	24.8
風呂、トイレ等個室	61	20.1
その他ホーム内	56	18.5
ホーム外(施設内)	33	10.9
施設外	22	7.3
合計	303	100
システム欠損値	5	
合計	308	

事案が行われた場所は9割以上が施設の敷地内で行われており、中でも8割以上が児童が生活を送るホームの中で行われている。
項目別では、被害児の部屋が最も多く(24.8%)、風呂・トイレ等個室(20.1%)、加害児の居室(18.5%)と閉鎖的な空間で行われる割合も6割以上と高くなっている。
プライベート空間で行われるようなケースに対しては、施設として予防・早期発見の取り組みをすすめていく必要があるだろう。

ケースの特徴 (発覚の経緯)

ケースの経緯



	度数	有効%
職員が発見する	102	33.2
被害児の申告	113	36.8
加害児の申告	10	3.3
他児の申告	59	19.2
その他	23	7.5
合計	307	100
システム欠損値		1
合計	308	

ケース発覚の経緯としては、「被害児の申告」が最も多く(36.8%)、次いで「職員が発見する」(33.2%)が多くなっている。結果的に「被害児の申告」に1/3を委ねている結果となっており、施設側、職員側からの早期発見に向けた取り組みが求められる。

また、加害児、被害児のどちらにも該当しない、「他児の申告」も2割近く発覚の経緯となっており、興味深い結果となった。

加害被害関係とケース発生場所の クロス集計

		加害児 の居室	被害児 の居室	風呂、トイ レ等個室	その他 ホーム内	ホーム外 (施設内)	施設外	合計
同性間	度数	51	53	51	45	5	9	214
	%	23.80%	24.80%	23.80%	21.00%	2.30%	4.20%	100.00%
	調整済み残差	3.7	0	2.5	1.8	-7.4	-3.2	
異性間	度数	5	22	10	11	28	13	89
	%	5.60%	24.70%	11.20%	12.40%	31.50%	14.60%	100.00%
	調整済み残差	-3.7	0	-2.5	-1.8	7.4	3.2	
合計	度数	56	75	61	56	33	22	303

同性間ケースは「加害児の居室」と「風呂・トイレ等居室」で発生することが、異性間ケースでは「ホーム外(施設内)」と「施設外」で発生することが有意に多いことが認められた。

カイ 2 乗検定	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	77.113a	5	0.000
尤度比	74.688	5	0.000
線型と線型による連関	38.104	1	0.000
有効なケースの数	303		

a 0 セル (0.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 6.46 です。

加害被害関係と発覚の経緯の クロス集計

		職員が 発見する	被害児の 申告	加害児の 申告	他児の 申告	その他	合計
同性間	度数	82	79	3	34	19	217
	%	37.80%	36.40%	1.40%	15.70%	8.80%	100.00%
	調整済み残差	2.6	-0.2	-2.9	-2.5	1.3	
異性間	度数	20	34	7	25	4	90
	%	22.20%	37.80%	7.80%	27.80%	4.40%	100.00%
	調整済み残差	-2.6	0.2	2.9	2.5	-1.3	
合計	度数	102	113	10	59	23	307
	%	33.20%	36.80%	3.30%	19.20%	7.50%	100.00%

同性間ケースは「職員の発見」が、異性間ケースでは「加害児の申告」と「他児の申告」が有意に多いことが認められた。

カイ 2 乗検定	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	19.092a	4	0.001
尤度比	18.372	4	0.001
線型と線型による連関	4.094	1	0.043
有効なケースの数	307		

a 1 セル (10.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 2.93 です。

まとめ、考察

- 児童福祉施設等で行われる児童間性暴力は男児から男児からの加害行為が多く見られる。
 - ⇒ 純粋な性的衝動のみではない他の力動から事案が生じる可能性が示唆される。
 - 全体の8割以上の事案がホーム内で行われており、6割ほどが居室や個室といったプライベート空間で行われている。特に同性間ケースの場合は加害児居室での発生割合が高く、異性間ケースはホーム外・施設外で行われる割合が高い。
 - ⇒ 施設における児童間性暴力の特徴として、生活空間であるホーム内で行われる、という特徴がみられる。居室や個室といった、ホーム内のプライベート空間(居室や個室)がケース発生場所となる割合も高く、こどものプライベート空間をいかに安心・安全な空間として守っていくか、対策の強化が求められる。
 - 発覚の経緯について、同性間ケースにおいては、「職員の発見」が高く、異性間ケースについては「加害児の申告」「他児の申告」が高い。同性間ケースのうち、特に男児から女児へのケースについては「加害児の申告」「他児の申告」が高い。
 - ⇒ 全体的に高い「職員の発見」「被害児の申告」に対して、早期発見のための職員のスキル向上、被害児が申告しやすい関係づくりが必要となる。
- また、異性間ケースについては加害児や他児も発覚のキーパーソンとなっているため、子ども同士の情報に目を向けることも重要となるだろう。

研究の限界および今後の課題

➤ 研究の限界

- ・スノーボール方式によるサンプリングから調査を実施したため、調査協力施設に偏りがある可能性を否定できない。
- ・本研究会の定めた性暴力の定義が包括的な定義のため、今回取り扱った性暴力の内容が多岐にわたっており、「児童養護施設等における児童間性暴力」の全体像をつかんだのみにとどまっている。

➤ 今後の課題

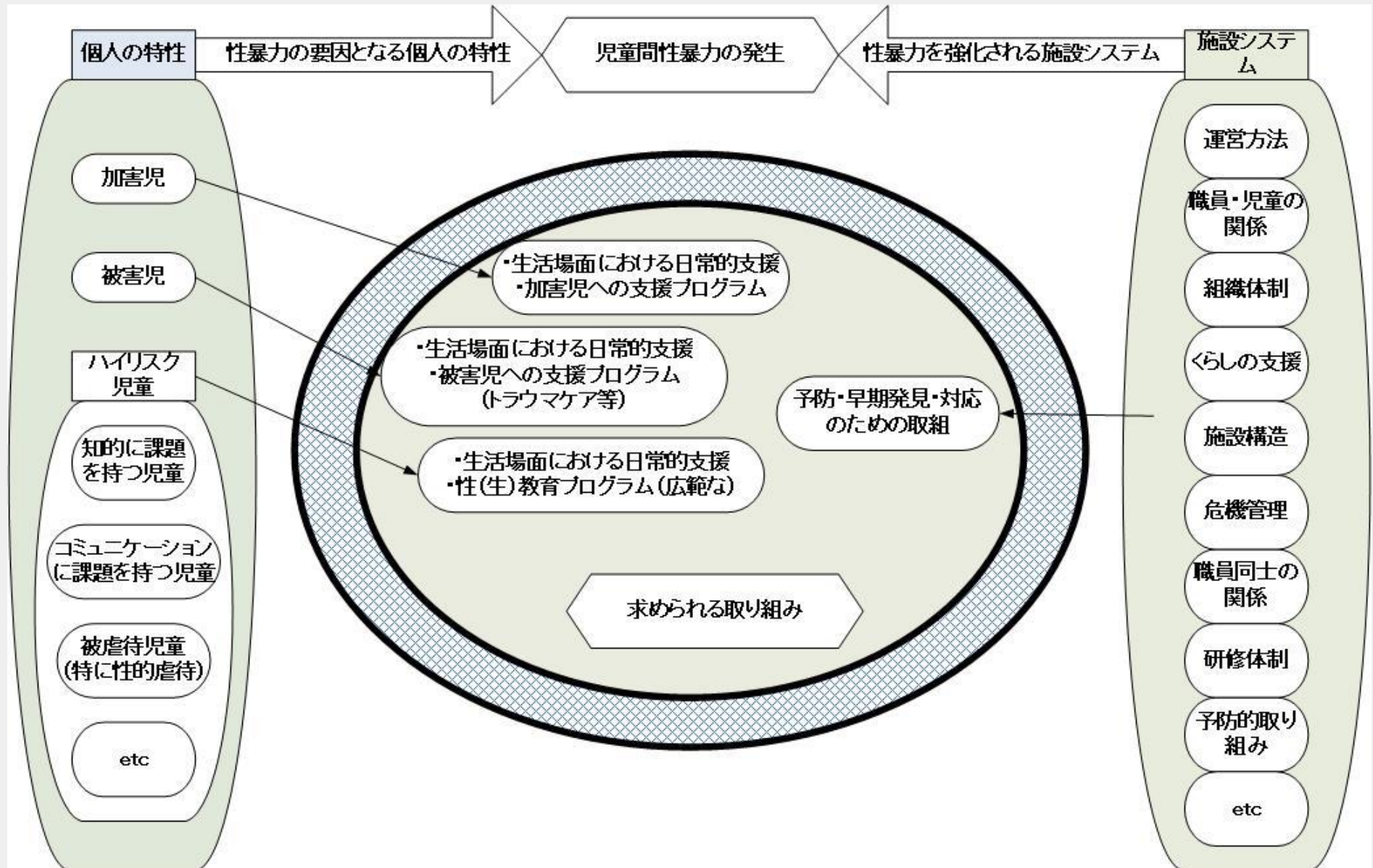
- ・ケースのみにとどまらず事案や加害児、被害児に着目することや、暴力の内容に関する分析をするなどより詳細について研究を進めていくことが求められる。
- ・事案発生後の対応や、その後の関係児童へのケアに関する実情についても明らかにする必要があるだろう。

児童養護施設等における児童間性暴力の予防・発見・対応に関する実践モデル開発に関する研究

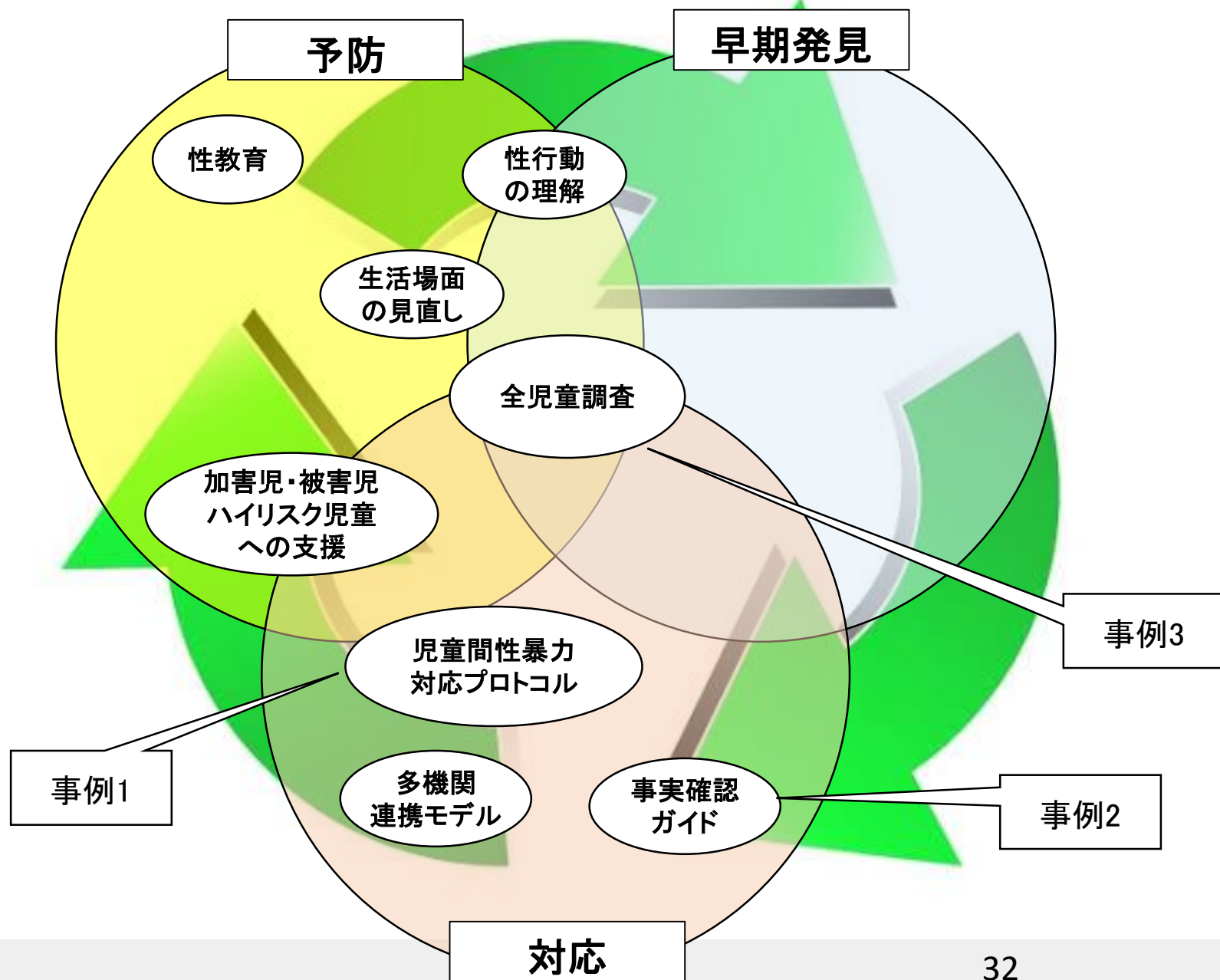
関西福祉科学大学

遠藤 洋二

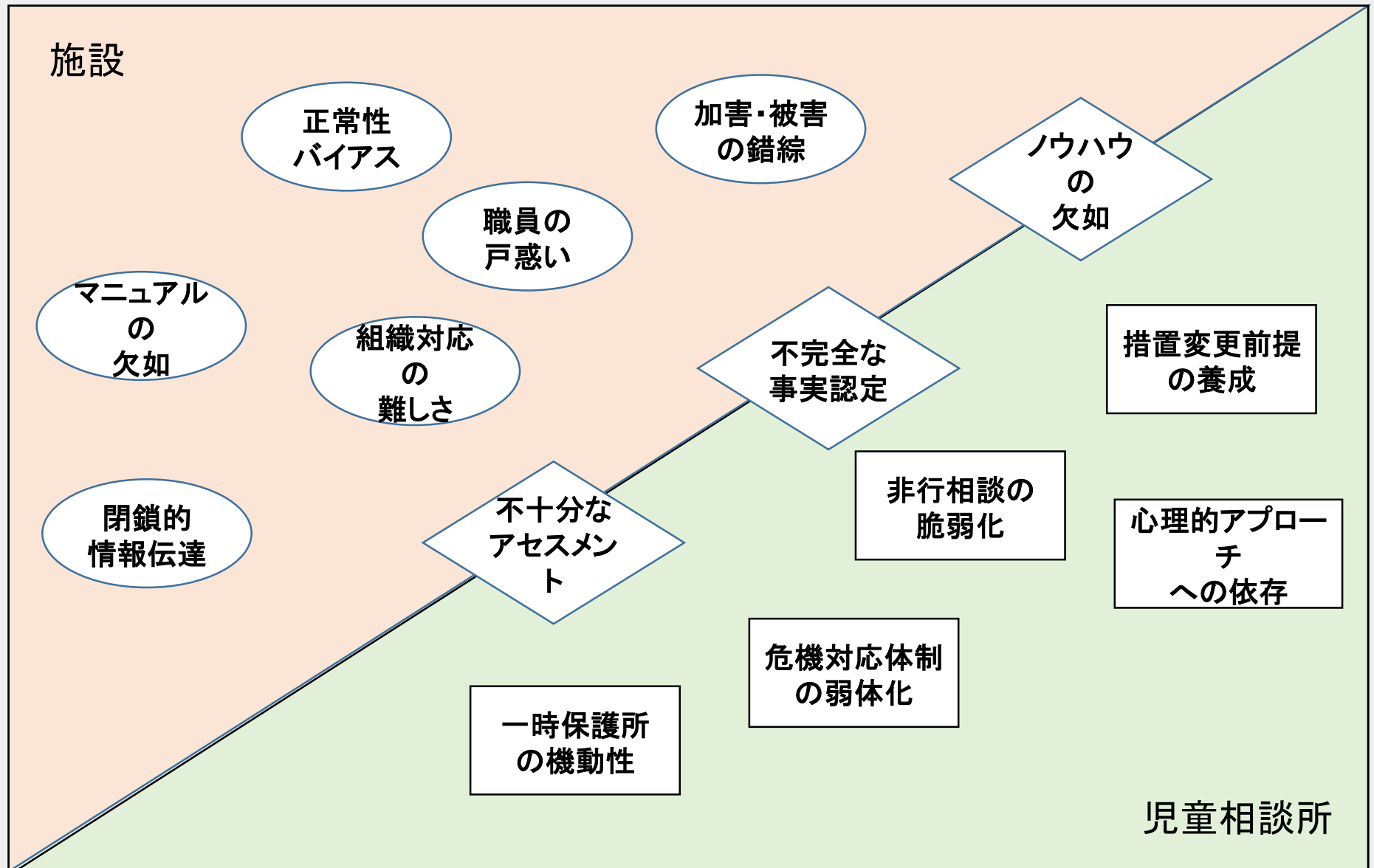
児童間性暴力の構造



予防・早期発見・対応



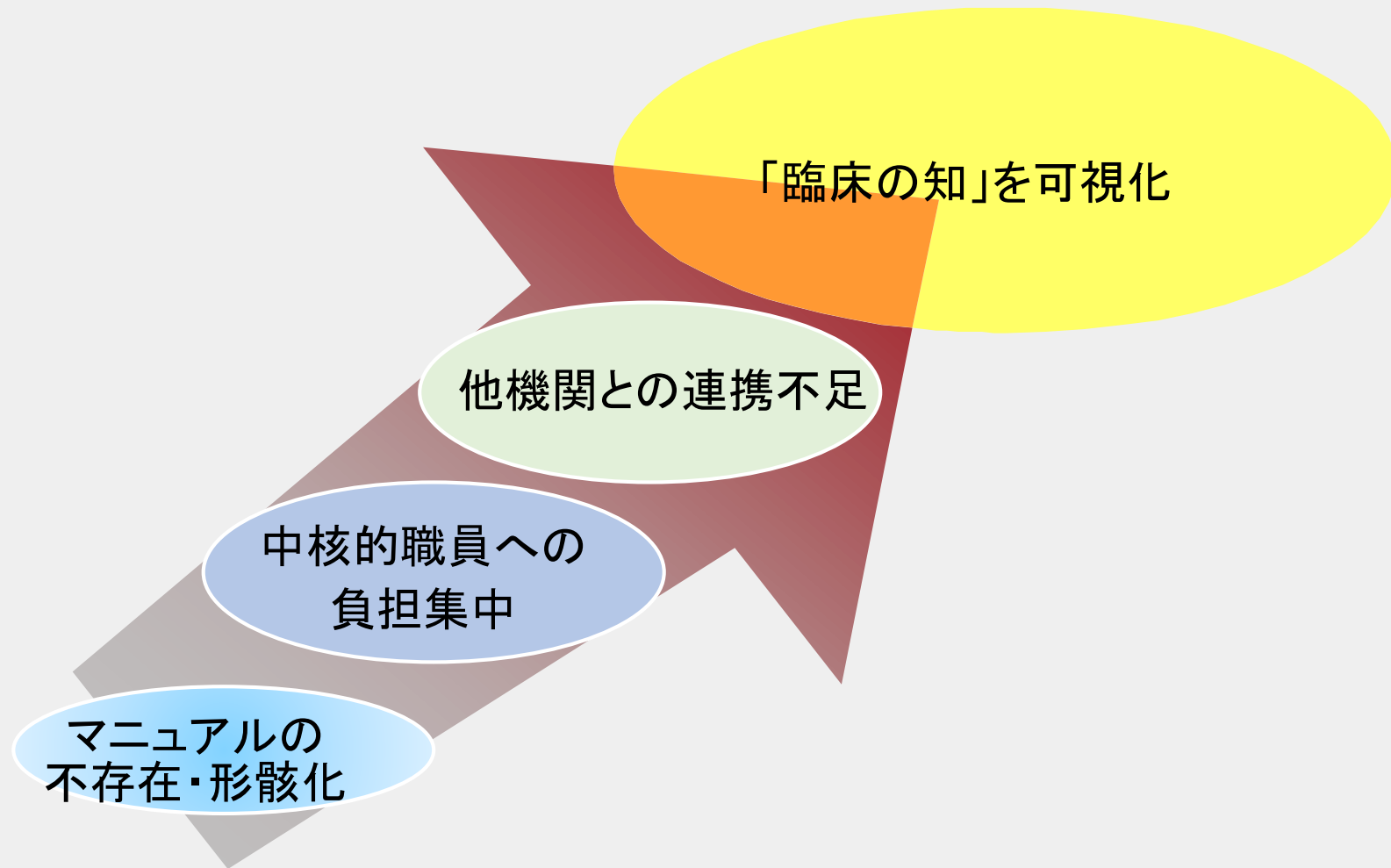
児童間性暴力対応の現状と課題



児童間性暴力対応プロトコル

神戸市こども家庭センター 篠原 拓弥

実践例①：プロトコル導入の理由



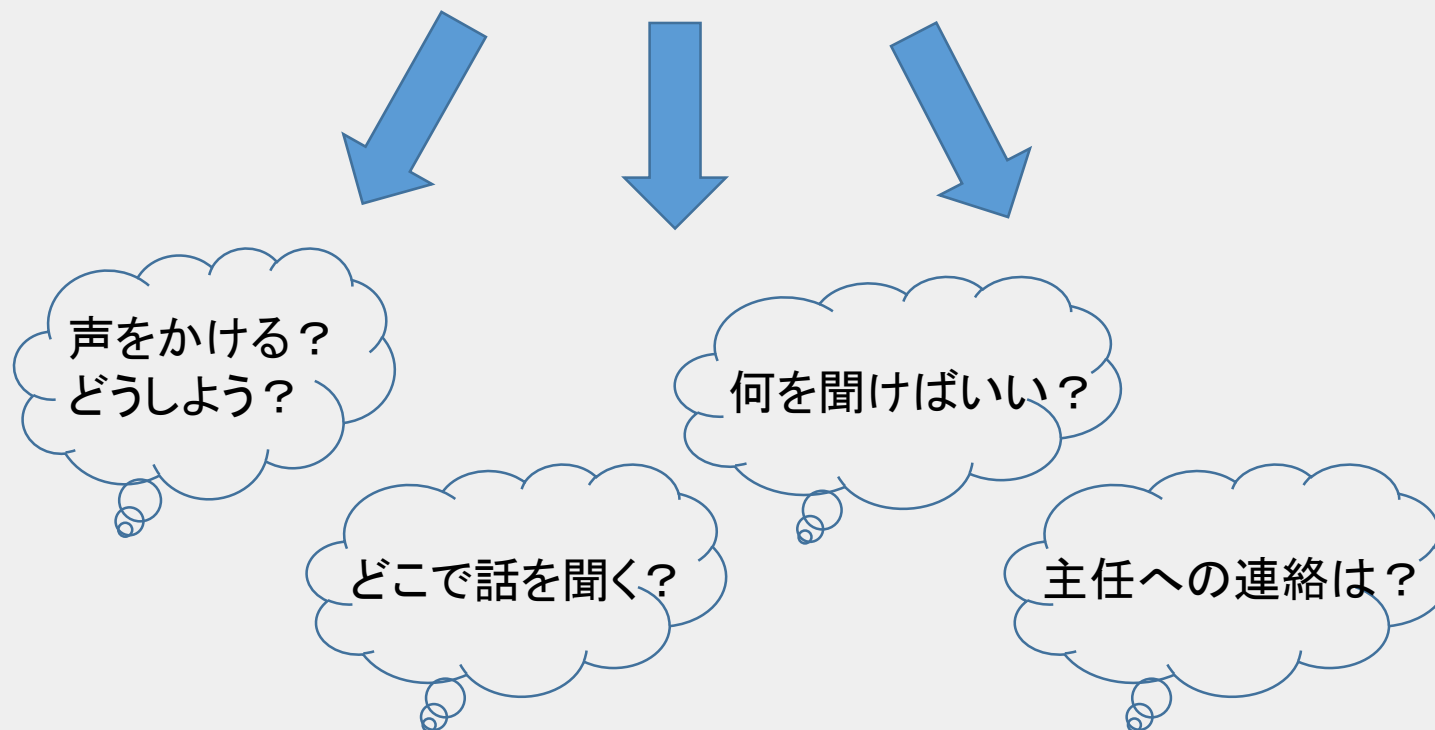
児童間性暴力対応プロトコル

表1:プロトコル策定の手順

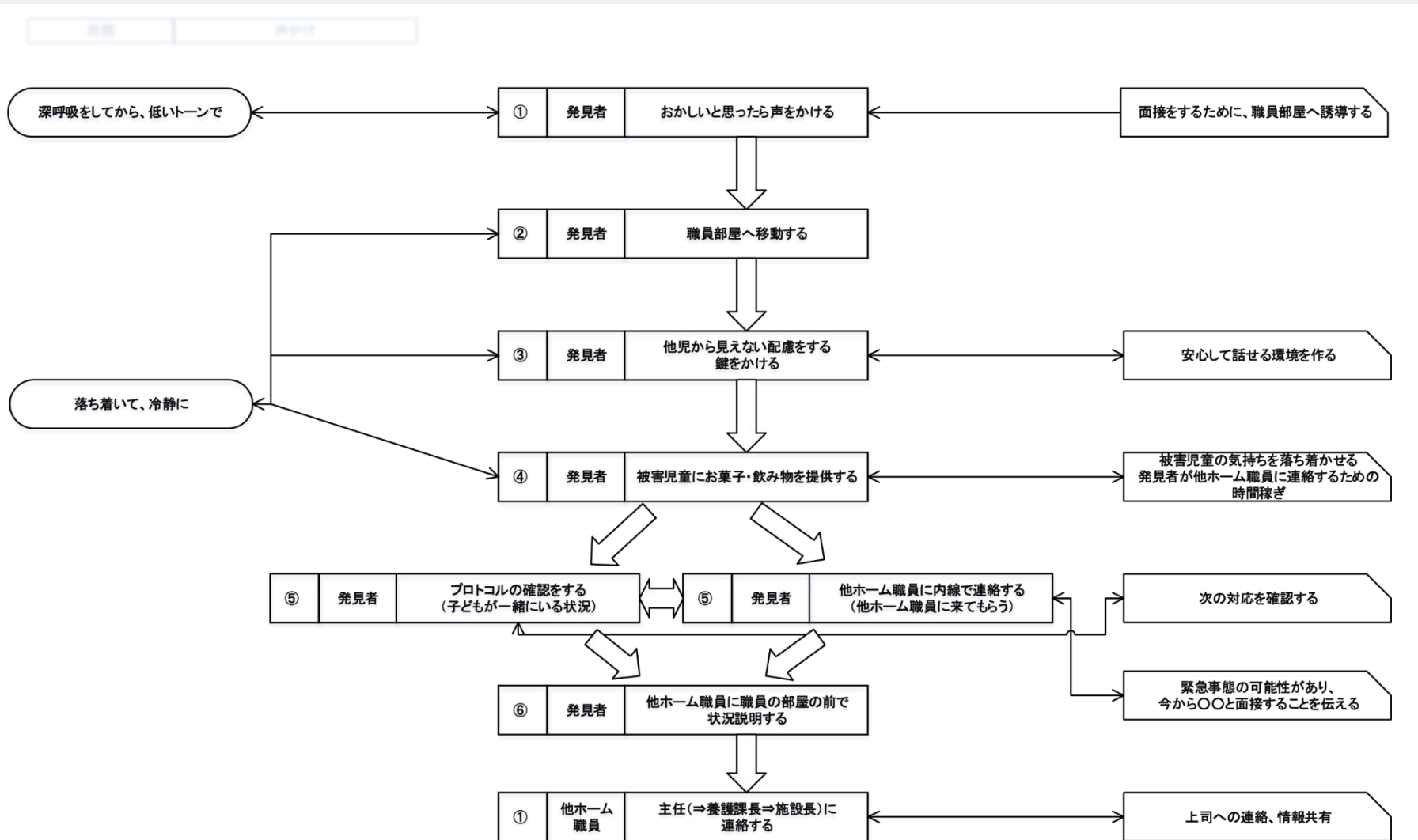
フェーズ			児童養護施設チーム	研究者チーム	
フェーズ1 (波長合わせ)			ワーキングチームの編成	キーパーソンの養成	
			施設見学・研修・ケースカンファレンス・参与観察など		
			マニュアル・様式等の洗い出し	先行研究の提示	
			チームミーティング		
			施設内への周知		
フェーズ2 (プロトコル策定)	ステップ1	ワークショップ1	研究者チームによる説明		
			ロールプレイ		
		参加者による評価(「気づきシートへの記入」、「グループ討議」)			
		アレンジメント1		「気づきシート」の整理・分析	
				プロトコル(叩き台)の策定	
	チームミーティング				
	ステップ2	ワークショップ2	プロトコル(プロタイプ)の提示		
			ロールプレイ		
		参加者による評価(「気づきシートへの記入」、「グループ討議」)			
		アレンジメント2		「気づきシート」の整理・分析	
			プロトコルの策定		
チームミーティング					
フェーズ3 (プロトコル活用)			プロトコルの設置		
			プロトコルに関する研修		
			実践場面での活用		
			プロトコルの改訂		
			他の課題への転用		
フェーズ4 (汎用化と普及)			プロトコルの効果測定	実践プログラム開発方法の提示	
			普及のための広報		
			プロトコル策定(他施設)の支援		

ロールプレイで明らかになった課題

深夜近くに巡回をしていた職員Aは、中学生男児の部屋から、下半身に下着を着けずに出てきた正也（小4男児：9歳）を発見した



児童間性暴力対応プロトコル



プロトコル導入の効果

< 参加職員のアンケートより >

- ・職員同士によるロールプレイを通しての勉強会は重要であり、レベルアップに通じる
- ・経験の浅い職員でも事実確認ガイドを用いることで、安心して聴き取りができる
- ・ワークショップへの参加の有無によって、対応の仕方が変わってくると思う
- ・多くの気づきと発見があった
- ・ロールプレイに基づいて議論することで、具体的なアイデアや提案が出てきた
- ・様々な職種が同じテーマで議論する機会は貴重
- ・性の問題をストレートに話しあえて良かった

実践例②: 事実確認ガイド

被害児童				記入者名			
記入年月日	/	/	児童氏名	性別		学年	年齢
発生日時(時間帯)	/ / ()						
場所	加害児童の居室		被害児童の居室		その他()		
加害児童	氏名		性別		学年	年齢	
性的暴力の態様							
・されたのか							
非接触性的暴力	性行為を見せる	自慰行為の強要	裸になることの強要	その他()			
接触性的暴力	身体のお撫()		キスの強要舐める()	その他()			
	手指・異物の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	性器の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	射精	無 / 有	場所	膣内 / 肛門 / 口内 / 体外 / その他			
・させられたのか							
非接触性的暴力	性行為を見せる	自慰行為の強要	裸になることの強要	その他()			
接触性的暴力	身体のお撫()		キスの強要舐める()	その他()			
	手指・異物の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	性器の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	射精	無 / 有	場所	膣内 / 肛門 / 口内 / 体外 / その他			
他の加害児童の有無	無 / 有	人数	名				
		氏名					
主導の加害児童	氏名		性別		学年	年齢	
他の被害児童の有無	無 / 有	人数	名				
		氏名					
緊急受診の要否(上司に連絡)	必要	不要	※ 連絡が取れない場合、現場判断で受診				
所感							

加害児童				記入者名			
記入年月日	/	/	児童氏名	性別		学年	年齢
発生日時(時間帯)	/ / ()						
場所	加害児童の居室		被害児童の居室		その他()		
被害児童	氏名		性別		学年	年齢	
性的暴力の態様							
・したのか							
非接触性的暴力	性行為を見せる	自慰行為の強要	裸になることの強要	その他()			
接触性的暴力	身体のお撫()		キスの強要舐める()	その他()			
	手指・異物の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	性器の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	射精	無 / 有	場所	膣内 / 肛門 / 口内 / 体外 / その他			
・させたのか							
非接触性的暴力	性行為を見せる	自慰行為の強要	裸になることの強要	その他()			
接触性的暴力	身体のお撫()		キスの強要舐める()	その他()			
	手指・異物の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	性器の挿入	無 / 有	場所	膣 / 肛門 / 口			
	射精	無 / 有	場所	膣内 / 肛門 / 口内 / 体外 / その他			
他の加害児童の有無	無 / 有	人数	名				
		氏名					
主導の加害児童	氏名		性別		学年	年齢	
他の被害児童の有無	無 / 有	人数	名				
		氏名					

事実確認ガイドの意義、特徴

<意義>

- ・事案発生直後から発見者が経験に頼ることなく適切な事実確認を行うことが可能
- ・ガイドラインの存在が心理的余裕を生み、当該児童を適切な支援につなげることができる

<特徴>

- ・感情や理由に焦点を当てず、事実のみに焦点を当てている
- ・ガイドラインにある項目のみを聞き取る

参考：篠原拓弥(2016)「児童養護施設における児童間性的暴力への対応 ～事実確認ガイドに関する研究～」

事実確認

アセスメント

支援

実践例③: 全児童聞き取り調査

全児童聞き取り調査									
聞き取り年月日		/ / /			記入者名				
No.	児童名			男 / 女		学年 年齢			
身体的暴力(殴る、蹴る、物を投げるなど)をされたことがありますか				はい		いいえ			
身体的暴力(殴る、蹴る、物を投げるなど)をしたことがありますか				はい		いいえ			
誰に									
心理的暴力(悪口、無視など)をされたことがありますか				はい		いいえ			
心理的暴力(悪口、無視など)をしたことがありますか				はい		いいえ			
誰に									
「プライベートゾーンを見る、触る、舐める」をされたことがありますか				はい		いいえ			
「プライベートゾーンを見る、触る、舐める」をしたことがありますか				はい		いいえ			

全児童聞き取り調査

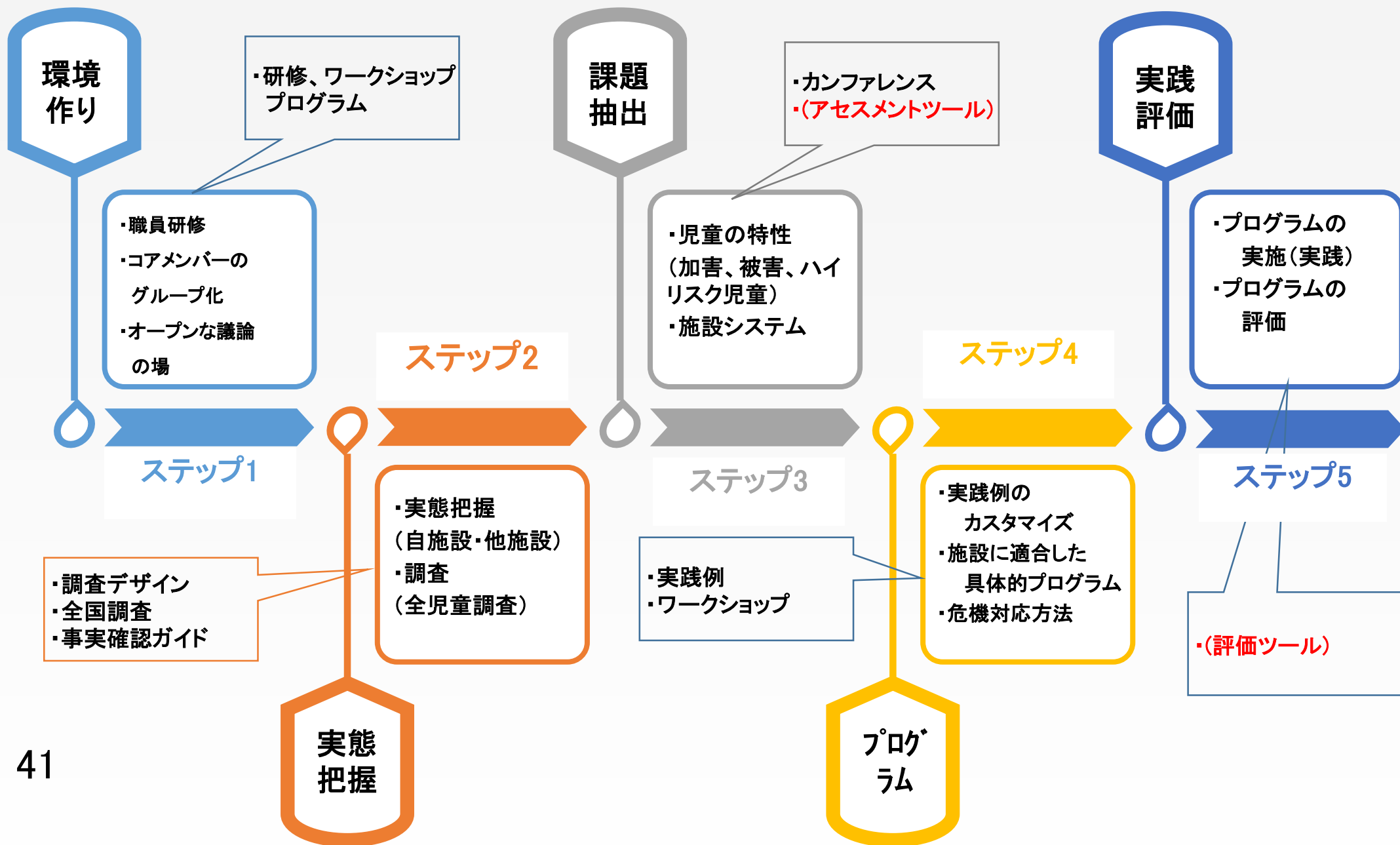
〈意義〉

- 当該児童の他に被害を受けた児童、加害を行った児童がいる場合が少なくなる
- 性暴力の広がりを把握できる
- 職員が事実に向き合っているという姿勢を示すことで、今後起こりうる性暴力への抑止となる
- 事案発生時だけでなく、平常時にも定期的に行うことで、性暴力の予防、早期発見につながる

〈特徴〉

- Yes、Noで答えられる簡単なもの
- 1人5分程度で終わることも可能
- Yesがあれば、事実確認ガイドに基づいた聞き取り

児童間性暴力「0」へのロードマップ



「児童養護施設等入所型児童福祉施設における児童同士の性暴力を考える」 セミナー（東京）

主催：神戸児童間性暴力研究会
代表：関西福祉科学大学 遠藤洋二

参加費
無料

児童養護施設等入所型児童福祉施設における 児童同士の性暴力を考える

2020年1月27日(月)

13:00 受付開始 13:30～セミナー
16:30 終了予定

場所 国立オリンピック記念青少年総合センター
センター棟3階 310研修室

定員 150名

※希望者が多数になった場合、
1機関からの参加人数を調整させていただくことがあります。

神戸児童間性暴力研究会では、2018年10月から児童養護施設・児童自立支援施設・障害児施設における児童同士の性暴力について、全国的な実態調査を行いました。その結果、これまで当該問題について語られていたことに加え、新たな発見もあり、その実態を一定程度明らかにできたと思っています。児童間性暴力の実態をふまえて、子どもの暮らしが安心して豊かなものになるよう、多くの方々と意見を交わしたいと考えています。



本セミナーは、「公益財団法人三菱財団」の助成を受け実施しています。

お問い合わせは

神戸児童間性暴力研究会

e-mail: kokuchpro@gmail.com

お問い合わせはe-mailでお願いします。
e-mailが困難な場合はFAXでも結構です。(072-942-2951)

【プログラム】

第1部 13:30～14:50

「児童養護施設等における児童間性暴力の予防・発見・対応に関する実践モデル開発に関する研究」の報告

- (1) 性暴力研究会および研究の概要
遠藤 洋二 (関西福祉科学大学)
- (2) 児童間性暴力の実態 ～調査の結果から見えること～
原 弘輝 (関西学院大学)

第2部 15:00～16:30

「児童間性暴力を考えるシンポジウム」


コーディネーター 遠藤 洋二 (関西福祉科学大学)
シンポジスト 村尾 泰弘 (立正大学)
山口 修平 (児童養護施設 一宮学園)
篠原 拓弥 (神戸市こども家庭センター)

【神戸児童間性暴力研究会について】

神戸児童間性暴力研究会（性暴研）は児童養護施設等における児童同士の性暴力について、研究・実践することを目的に2017年2月、現場の職員（児童養護施設・児童自立支援施設・児童相談所・自立援助ホーム等）・研究者が立ち上げました。
月1回の定例会を中心に調査・研究を重ね、暴力（性暴力を含む）のない入所型児童福祉施設とするための実践的方法を確立させたいとお思い活動しています。
来年度には、性暴力の予防・早期発見・対応のためのハンドブックも出版する予定です。興味のある方のご参加をお待ちしています。
（ご希望の方は表面のメールアドレスまでご連絡ください）



【申し込み方法】

参加申し込みは、「こくちーずpro」(<https://www.kokuchpro.com/>)から登録をお願いします。
上記HPからの上部にある「検索」 ボタンをクリックすると詳細検索画面に変わります。
開催地：東京 開催日：2020/1/27 で検索するとイベント画面が表示されます。



「児童養護施設等入所型児童福祉施設における児童同士の性暴力を考える」 セミナー(大阪)

主催：神戸児童間性暴力研究会
代表：関西福祉科学大学 遠藤洋二

参加費
無料

児童養護施設等入所型児童福祉施設における

児童同士の性暴力の実態 ～調査の結果から見えること～

2020年2月17日(月)

13:00 受付開始 13:30～セミナー
16:30 終了予定

場所 阿倍野区民センター

小ホール

定員 300名

【企画趣旨】

私たち研究会では、2018年10月から児童養護施設
児童自立支援施設・障害児施設における児童同士の
性暴力について、施設等の現場職員である研究会メ
ンバーが全国の施設を訪問し、実態調査を行いました。
その結果、これまでこの問題について語られて
いたことに加え、新たな発見もあり、その実態を一
定程度明らかにできたと考えています。本セミナー
において調査結果を報告すると共に、皆様方と知恵
を出しあうことで、性暴力のない施設となる一助に
なれば幸いです。



この問題を一緒に
考えてみませんか？

本セミナーは、「公益財団法人三菱財団」の助成を受け実施しています。

神戸児童間性暴力研究会

お問い合わせは

e-mail:fukka.seibou@gmail.com

お問い合わせはe-mailでお願いします。

e-mailが困難な場合はFAXでも結構です。(072-942-2951)

【プログラム】

第1部 13:30～14:50

研究報告：「児童養護施設等における児童間性暴力の実態と対応」

(1) 研究会の取り組みと調査研究の概要

遠藤 洋二 (関西福祉科学大学)

(2) 全国調査の結果から見えること

早川 一穂 (児童養護施設 三光塾)

第2部 15:00～16:30

シンポジウム：「児童同士の性暴力を考える」

コーディネーター 遠藤 洋二 (関西福祉科学大学)

シンポジスト 藤原 正範 (鈴鹿医療科学大学)

大久保 真紀 (朝日新聞社)

永井 友基 (神戸市こども家庭センター)

【神戸児童間性暴力研究会について】

神戸児童間性暴力研究会(性暴研)は児童養護施設等にお
ける児童同士の性暴力について、研究・実践することを目的
に2017年2月、現場(児童養護施設・児童自立支援施設・児童
相談所・自立援助ホーム等)の職員・研究者が立ち上げました。
月1回の定例会を中心に調査・研究を重ね、暴力(性暴力を含
む)のない施設とするための実践的方法を確立させたいと思
っています。

来年度には、性暴力の予防・早期発見・対応のためのハンド
ブックも出版する予定です。

(性暴研に入会希望の方は以下の事務局アドレスまでご連絡
ください。)

e-mail:fukka.seibou@gmail.com



【セミナーの参加申し込み】

参加申し込みは、「こくちーずpro」(<https://www.kokuchpro.com/>)
から登録をお願いします。

上記HPからの上部にある「検索」 ボタンをクリックすると詳細
検索画面に変わります。

開催地：大阪 開催日：2020/2/17～2020/2/17

で検索するとイベント画面が表示されます。

※同じ内容のセミナーを東京でも開催します。

お間違いないようお願いいたします。



連絡先等

※性暴研に参加ご希望の方は、以下のメールアドレスまで

fukka.seibou@gmail.com

※ホームページ ; <https://www.kobeseibouken.com>

※研修やワークショップをしたいなど、その他お問い合わせ

関西福祉科学大学 遠藤洋二 yendo@tamateyama.ac.jp